

異邦人クリスチャンの立ち位置について、以下の文書はとても参考になります。

BFP —Teaching Letter より— ビル・アダムズ(BFP アメリカ副局長)

四つのレンズを通して見るイスラエル



●ローマ人への手紙9章から11章で使徒パウロは、聖書全体の中で最も重要な奥義の一つについて論じています。その奥義とは何でしょうか。それは、イスラエルとユダヤ人についてです。これは、現代の異邦人クリスチャンにとっても、重きを置く必要のある重要な奥義です。しかし、以下に挙げる3つのみことばは、聖書の中で敬遠され、誤解され続けて来た箇所です。これらのみことばは謎に満ちており、イスラエルについての驚くべき奥義が隠されています。

●パウロは、この素晴らしい奥義を敬遠させたり、誤解させたりしようとしたわけではありません。彼は次のように、明確に語っています。

「……兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。」(ローマ11・25a)

つまり、奥義を知らないで聖書を読み続けていると、「自分自身の理解」が先行して高慢に陥るかもしれません。同じ章の前半でパウロは警告しています。

「あなたはその枝(折られた枝)に対して誇ってはいけません。」(ローマ11・18a)

「高ぶらないで、かえって恐れなさい。」(ローマ11・20b)

ここではとても重要なことが語られていますが、何世紀もの間、この箇所は重要視されず、避けられる傾向にありました。しかし、慈しみ深い神は、この聖書箇所を通して、私たちにイスラエルについての奥義を明らかにしてくださったのです。

イスラエルに焦点を当てて見る

●キリスト教国が取り続けてきた、ユダヤ人に対する一般的な態度は、彼らを敬遠するということでした。しかしパウロは、この奥義を知らないままにすることがないように、ローマ人への手紙9章から11章全体にわたって、神と契約を結んできたイスラエルに、神がどのように働いてこられたのかを書き記しています。その

パウロの切なる願いにもかかわらず、歴史の中で多くのキリスト教国が「神のひとみ」（ゼカリヤ 2・8b）と呼ばれた民族に対し、背を向けることを選択したのです。

●多くのユダヤ人が、メシア（救世主）であるイエスを受け入れなかったことは、1世紀の初代教会のクリスチャンにとって悲しむべきことでした。なぜなら、キリスト教がユダヤ人であるイエス・キリストとユダヤ人の弟子たちから始まったにもかかわらず、ほとんどのユダヤ人が、この「救いの道」（使徒 22・4）に従わなかったからです。そのため、神の計画はユダヤ人を離れ、教会が取って代わった、という考えが台頭し始めました。そして、ガラテヤ人への手紙にある「神のイスラエル」という言葉によって、クリスチャンこそがイスラエルである、という置き換えの解釈が起きました。「神のイスラエル」という言葉は、ガラテヤ人への手紙 6章 16節だけに出てきますが、それは決して教会がイスラエルに取って代わるという意味ではありませんでした。

●人が自分のレンズを通して聖書を見ると、神の意図するところをゆがめて、聖書に自分の価値観を当てはめてしまう恐れがあります。聖書を読むときには、素直に字義通りに読むことが大切です。「字義通りの解釈」というレンズを通して見ると、イスラエル民族が神の契約の中で存在し続けていることが見えてくると共に、霊的なアブラハムの子孫（クリスチャン）の存在も、より明確になってきます。

●それをローマ人への手紙 9章から 11章に適用すると、「実際のイスラエルと霊的イスラエルの、まるでどちらか一つしかない、あるいは、どちらか一つしか重要ではない」というような分析をする必要がなくなります。また、イスラエルを別のものに置き換える必要もなくなります。代わりに、御国を待ち望むというレンズを通して見ることによって、神が最高の目的のために、実際のイスラエルと霊的イスラエルの両方を完成に導いておられることが見えてきます。

●国際的聖書教師であった故デレック・プリンスは、この問題を次のように分かりやすく定義しました。「聖書の中でイスラエルと書かれている箇所は、例外として書かれていない限り、実際のイスラエルを表しており、象徴的な他のものを表しているわけではない。神が地上の民を見るとき、イスラエルを中心に置いている。イスラエルを軸に、他のすべての国々が周りを旋回する。イスラエルは出発点であり、中心でもある」と。なぜなら、イスラエルを軸として聖書は書かれているからです。

●聖書の中で、神はイスラエルについての奥義を初めから啓示されています。しかし、何世紀にもわたって多くの人々はその奥義を知ろうとせず、かえってそれらをないがしろにしてきました。今、私たちは神を恐れ、4つのレンズを通してイスラエルの奥義を見てみましょう。それは、「敬遠」、「置き換え」、「過大な評価」、「正当な理解」というレンズです。

第一のレンズ—「敬遠」

●2000年もの間、キリスト教国はイスラエルについての奥義を敬遠し続けてきたため、ユダヤ人に対してだけでなく、教会自身も健全さと活力を失うという、計り知れない不利益を被ることになりました。この「敬

遠」は、決して故意に無視したということではなく、その事実と直面することを避けてきたということです。

●歴史の中で、ユダヤ人の存在が永遠に軽視され続けるように思われた時代には、イスラエルを敬遠しておくほうが聖書を理解しやすかったのです。なぜなら、ユダヤ人が世界中に離散し、イスラエルという国もなかったからです。しかし 19 世紀以降、ユダヤ人は約束の地に次々とアリヤー（帰還）し、彼らは再び世界史の表舞台に登場しました。そればかりか、その中心的存在を演じるまでになりました。そのため、イスラエルについての奥義を敬遠することはもはやできなくなり、ユダヤ人の存在を認めざるを得なくなりました。

●神学的にイスラエルを敬遠することで、ローマ人への手紙 9 章から 11 章は聖書全巻の中においても理解が難しく、重要視されない箇所となりました。その視点でローマ人への手紙を読むと、9 章から 11 章が、その前の 1 章から 8 章、後の 12 章から 16 章と関係のない、つながりのない箇所と見なされてしまいます。

●「パウロがローマ人への手紙で最も主張したかったのは 8 章である」という理由から、その後の 9 章から 11 章を単に補足と理解する人々もいます。しかし、本当に単なる補足なのでしょうか。聖書を素直に読み、字義通りに解釈するならば、事実は明白です。8 章の終わりでパウロは、神と民とを切り離すことができるものは何もないと断言しています。「それならばイスラエルはどうなのか？ イスラエルの不信仰によって、彼らは神から切り離されたのではないのか？」という疑問が起こります。それに対してパウロは、9 章から 11 章で論理的に反論をし、11 章 1 節でははっきりと「絶対にそんなことはありません」と答えています。この議論をパウロは、「……すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」(11・36) と、驚くべき計り知れないイスラエルの神への賛美で終えています。

●歴史の中で、いろいろな神学的立場が登場しましたが、それらによって教会は確かに祝福を受けました。そのような中、ある神学者たちは動的なイスラエルを静的に理解しようとしていました。ローマ人への手紙 11 章 30 節から 32 節について、ある神学者は次のように記しています。「イスラエルについての神の将来の目的をすべて除外するわけではないが、11 章に書かれているイスラエルに関する未来はすべてを字義どおりに解釈しないように」と主張しています。このように、動的なイスラエル、つまり実際に存在するイスラエルを静的なイスラエルとして、単なる象徴的な教育的「型」へとめ込んでいくのです。

●同様に、ある学者たちはユダヤ人が約束の地にアリヤー（帰還）するという預言は、「メシアの再臨の時に起きる、最終的な死人の復活の時にのみ成就する」と解釈しました。彼らは、聖書に書かれているイスラエルへの土地の約束、子孫の約束、祝福の約束を十分に理解することなく、かえってイスラエルについての神の約束を敬遠することによって逃れようとしたのです。このことについて神学者であり作家のラニエ・バーンズは、「クリスチアンの伝統の中で、ローマ人への手紙 11 章は、注意深く解釈され、適用されるよりもむしろ、都合よく書き換えられたり、敬遠されたりしてきた」と述べています。そしてこの敬遠によって、教会は傷を受けることになったのです。

●聖書はイスラエルを、そして教会をどのように語っているのでしょうか。次号後編では、イスラエルを見る

残り3つのレンズ、「置き換え」、「過大な評価」、「正当な理解」がもたらす結果について学んでみましょう。前編では、『4つのレンズを通して見るイスラエル』と題し、イスラエルとユダヤ人についての奥義をローマ人への手紙9章から11章に焦点を当て、学び始めました。後編はその第二のレンズ「置き換え」から続けて学んでまいりましょう。

第二のレンズ——「置き換え」

●敬遠よりダメージが大きいのが高慢です。敬遠が無視となり、やがて軽視となって次第に高慢になっていきます。パウロは警告を与えています。「そのとおりです。彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。」（ローマ 11・20）ユダヤ人に対する敬遠から軽視となる過程は、初期のローマ教会に始まります。これは、それ以降何世紀にもわたってユダヤ人が顧みられなくなったことから伺うことができます。

●ローマ人への手紙が書かれた当時、ユダヤ人よりもイエス・キリストを信じる異邦人が増えていく中で、パウロは9章から11章で「接ぎ木された異邦人クリスチャンが、その台木であるイスラエルに対し誇ってはいけない」と明確に語りました。さらに、神は栽培種のオリーブであるユダヤ人に接ぎ木された、野生種なる異邦人クリスチャンの枝を切り落とすことをいとわれないと警告しています。「もし神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。」（ローマ 11・21）。神がイスラエル民族の契約を異邦人教会に置き換えるなら、ご自身の契約を破られたということになります。しかしそれは決してあり得ないことです。

●敬遠、軽視、高慢の過程を経て、近代は個人主義的傾向が強くなってきました。「私は私の救いを失っていない」と、個人の救いにのみ焦点が当てられがちです。そのため、神が「高価で尊い」と言って大切にされているユダヤ人を、自分のための単なる教訓の「型」として捉えるようになっていきます。神はイスラエルとの契約を破棄し、それを教会にお与えになるという置き換えをしておられません。今こそ私たち異邦人クリスチャンは、神がイスラエルと結ばれた契約は決して変わることがないことを知り、パウロがここで私たちに伝えようとした真理を知る時です。

第三のレンズ——「過大な評価」

●「敬遠」と「置き換え」の歴史を修正するべく、逆にイスラエルが過大に評価されてきた事実を知ることもまた重要です。振り子を戻そうとして、逆方向に戻り過ぎることがしばしばあります。ある人たちはイスラエルが神の選びの国であって、過ちを犯すことがないと教えています。その理論に沿うなら、イスラエル政府のあらゆる決定が神によってなされたこととなります。もちろんそんなことはあり得ませんし、真実ではありません。

●またある人たちは神とユダヤ人との特別な関係に焦点を当て、「二契約神学」を唱えるようになりました。異邦人クリスチャンはイエス・キリストによる新しい契約によって救われ、ユダヤ人はアブラハム・モーセ契

約によって救われるという教えです。救いに至る道は一つしかありません。この神学は福音主義の中で否定された、誤った神学的概念です。

●イスラエルの奥義（ローマ 11・25）を説明するとき、イスラエルを民族全体として考えるか、個人個人として考えるかという点が問題となります。神はいつも一人ひとりを個人として愛しておられますが、聖書全体を通して神は、イスラエルを基本的に民族として取り扱っておられます。この地上で神から特別な契約を与えられている民族はイスラエル以外一つもありません。

●彼らは諸国の中であって神の存在を証明し、ほめたたえるために存在します。イスラエル民族の優劣にかかわらず、神の霊的な祝福、実質的な祝福は彼らを通して運ばれてきました。トーラー（モーセ五書）、契約、預言、聖書、使徒、そしてイエスご自身、これらすべてはイスラエル民族を通してこの世界に与えられました。また、ユダヤ人人口は世界人口のたった0・25%であるのに、彼らはアスピリン、ポリオワクチン、ジフテリア治療の血清、輸血、肝炎ワクチン、抗生物質、ビタミンなど多くのものを開発、提供し、私たちの命を守りました。神が称賛されない部分は私たちも褒めるべきではありませんが、ユダヤ人がどんな状況下にあっても異邦人クリスチャンは次のみことばを覚えておくようにとパウロは言っています。「神の賜物と召命とは変わることがありません。」（ローマ 11・29）

第四のレンズ——「正当な理解」

●私たちはイスラエルを「敬遠」「置き換え」「過大な評価」というレンズを通して見てはならないことに気づき始めています。また、実際のイスラエルはそれらの解釈とは対照的な存在であることも明らかになってきました。パウロが、ローマ人への手紙 11 章 28 節で神の選びに関して述べていることに目を留めましょう。今、あなたの前にいるユダヤ人はアブラハム、イサク、ヤコブの子孫として神に愛されている人たちです。ですから、たとえユダヤ人が神に敵対しているかのように見えても、みことばに「彼らは……父祖たちのゆえに、愛されている者なのです。」とあるように、神の時を待ち、彼らは存続し続けているのです。

●パウロはローマ人への手紙 11 章で、イスラエルは栽培種のオリーブであり、異邦人クリスチャンはその枝に接ぎ木された野生種のオリーブであると言っています。これは、エペソ人への手紙 2 章 14 節の「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、」という、ユダヤ人と異邦人の間に存在する神が置かれた「隔ての壁」がメシアによって取り除かれると説明されている箇所と符号します。ここで鍵となるのはエペソ人への手紙 2 章 15 節にある「新しいひとりの人」です。この一致への動きは、基本的には神の本来の民であるユダヤ人の耕した地に、以前は異教徒であった人たちが入るということです。その入口をクリスチャンは知っています。神がモーセと交わした契約の規定をイスラエルが守ることによって義と認められるのではなく、神がアブラハムと交わした契約を信仰によって受け取り、キリストの血による新しい契約によって祝福を受けるということです。イスラエルを「正当な理解」というレンズを通して見ると、以下のような両者の関係が見えてきます。

●イスラエルは台木であり、源であり、根です。根が張るためには特定の土地が必要です。

異邦人クリスチャンは接ぎ木された枝です。それは多くの枝を持ち、元々の位置から離れて広がっていきまし
た。イスラエルは部分的に盲目で、果たすべき自身の役割を認識していない状況にあります。

異邦人クリスチャンの一部は、イスラエルという源に内在する知恵と知識の富を認識していません。

イスラエルは、息子（イエス）、使徒たち、イエス・キリストを信じる群れを生み、養育しました。

異邦人クリスチャンは青年期から成熟し、イスラエルの犠牲を認識できるようになり、神がイスラエルに相続
されたものを大切に、慰め、守ることでイスラエルに対する負債を返済します。

神は、「どちらか／または」といった構造に縛られてはいません。イスラエルと異邦人クリスチャンの「両方
／及び」を、神の恵みにより、まとめて解決してくださるのです。そして私たちがそうすることができます。

結論

●「イスラエルの回復なき教会は、スター選手のいないラグビーチームに似ている」とマルコム・ヘディング
国際クリスチャン・エンバシー（ICCE）理事は言います。聖書の預言どおり、イスラエルは今まさに回復
の兆しを見せています。イスラエル物語は始まったばかりなのです。「もし彼ら（イスラエル）の違反が世界
の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいもの
を、もたらすことでしょう。」（ローマ 11・12）

●今、成長した異邦人クリスチャンがへりくだり、接ぎ木された枝であることを認め、神のあふれる恵みを感
謝して受け取り、神の視点に立ってユダヤ人のために立ち上がる時が来ています。